

座 談 会



誘導保育の成立のころ（昭和初期）



司 会 津 守 真
出席者 及 川 ふ み

新 庄 よ し こ
菊 池 フ ジ ノ
徳 久 孝
他

津守 皆さんお忙しいところ、お集まりいただきありがとうございます。今年はずいぶんお忙しそうですね。今年はずいぶん幼稚園創設九十年の年であり、現代の幼児教育の基本形ともいえるべき誘導保育の始まったころ、すなわち大正末期から昭和の初めのころの様子をお話しただろうと思っております。

先ごろ出版された倉橋惣三選集の第一巻に掲載されている『幼稚園保育法真諦』は、初版が昭和九年に出版され、第一篇、第二篇、第三篇は倉橋惣三先生が書かれたものですが、さらに第四篇『誘導保育の実際』というのが本当はついているのです。それは、当時附属幼稚園でやっていた誘導保育の実際を、現場の保育担当者が書いたものです。幸いに今日は、その執筆者である及川

先生、新庄先生、菊池先生、徳久先生にお集まり頂くことができましたので、その頃のことをめぐっていろいろおはなしいたきたいと思います。こんなに早い時代に既にこんなに新しい保育をしていたということは特記すべきことだと思いますので、是非その実際の状況も紹介したいし、また皆さまが今それをどのように見ているかということなども伺えると、大変参考になると思います。どうぞよろしくお願い致します。

（この第四篇の誘導保育の実際例として、新庄よしこ「旅へ」と、徳久孝「わたくし達の自動車」の一部を抜粋して、この座談会の後に掲載してあります）

及川 ああ倉橋選集にはこの第四篇は載っていないんですね。そう

すると、新庄さんの「旅へ」と「人形のおうち」が菊池さんね。それから三が「大売り出し」ね、「大売り出し」は神原さんだったかしら。それから「わたくし達の自動車」

菊池 それが徳久先生の？

徳久 はい。

及川 大きい自動車でしたね。

徳久 今見ると、何とも旧式な自動車です。

津守 それで及川先生のはここに載っていないけれど。

及川 ええ、私の誘導保育はこれには載っていないから（第一ページのカットをさして）せめてこの藤棚を描いてくれとおっしゃって、それで園庭の藤棚をちょっと描いてみたんですよ。

新庄 ああそうですか。

及川 で、あなたの「旅へ」は昭和七、八年ですか。

新庄 ええ、そうらしいわね。

及川 私ね、いつからこういう誘導保育らしいまとまったあそびをするようになったかしらと思って考えてみたら、震災後、バラックの保育室の時ですね。ちょうど徳久さんが実習料にお入りになったあそこからポツポツ始めて、保育室のすみっこにおもちゃ屋さんとか八百屋さんだのついでというのを、つい立てやコーナーを利用して小規模にやったのが最初ですね。それからだんだんそういうようなことが発展したよう。

菊池 そうですね、もうバラックの時に、箱のおうちで作った街ね、あれの写真がありますし、それからおもちゃ屋さんの写真もありませんものね。

及川 そういう風に、ごく初歩はバラックのころで、本格的にやり出したのはこの園舎に移ってからだと思います。

菊池 初めのころに、砂箱がありましたね。

及川、新庄 ええ、ええ。

菊池 ちょうどあのころ、聖橋（お茶の水駅付近）ができたでしょ。

それで私、最初にあれを砂箱でしたおぼえがありますの。そしてあの幼稚園のおばさんに、「大野シェンシェイは粘土をたくさん持って行って困りヤンス」（笑）なんてしかられたのおぼえてるわ。あのころおばさん、粘土を糸でちぎってはひとつずつくわえていたのに、聖橋の分量だけ下さいなんていったものだからしかられたのね。まあそれも、誘導保育の初歩ですね。

新庄、及川 そうでしょうね。

菊池 それをしたのと、それから動物園をしたのをおぼえています。砂箱で小規模にね。

新庄 本当に砂箱が重宝でしたよね、他のものがあんまり無かったのですもの。

及川 堀先生が向こうに行ってお帰りになった時に、あちらの幼稚園や何かでは、部屋の中でサンドボックスをやっているような所があるっておっしゃったのから、砂箱を作ったのです。

菊池 ちょうど、この机ぐらいじゃないでしょうか、大きさは。

新庄 あれで、魚つりあそびをずいぶんしました。それから、てんとう虫をたくさん並べて、虫の家をしました。

菊池 あの砂箱、きつと物置にまだあるんじゃないかと思うんですよ。

及川 各部屋に一つずつあったんです。砂が入ると重いので、足に車がつけてあってね、普段はブリキだかトタンだかのふたをして、いろいろこしらえたものを並べたり置いておくんです。

新庄 まあ部屋に余裕があったわけね、あのころ。今じゃ、各部屋に材料がゴチャゴチャあるでしょ。あのころは何にもなかったですものね。

及川 とに角、何かあいうまとまったあそびをするのには、相当材料が必要なんですよね。だから計画を早くたてて準備をしなければならぬ。

新庄 そうそう、そうするとまた、その計画の中から思いつきが出てくるの。そうするとそれでまたひとつできて、それからそれからと続いて行きますからね。そこが、その誘導保育っていうんでしょうか、そういうふうに各部屋で先生が考えを次々とまとめていったわけですよ。

菊池 で、あのころやった誘導保育、もつとないかしらと思うんですけど、なかなかたねがないわねえ。(笑) 汽車のことか。

及川 誘導保育するのに都合のいい、子どもが活動をたくさんできて、子どもに興味があって、それからこちらで用意できる材料っていうのは、やはりいくらか制約がありますね。

私は、こっちの園舎に移ってからは組を持たないで皆さんのしでいらっしやるのを見る方が多かったですよ。そうすると、こういう主題でやろうということではいらっしやるやりかけの様子を見ていると、まず先生がとても楽しいらしいわね。子どもに入る前に、もう先生自身がおもしろくてたまらなくて、それでやっ

ぱり先生が中心でその興味をもって進んで行ったのが多いんじゃないでしょうか。おしまいごろになると、子ども自身から出発することが多いですけど。

津守 本当に、これを読むともういかに楽しさが紙の上にあふれているんですね。それで今この幼稚園でやっている保育を見てからこれを読むと、あ、このころの誘導保育にそのもの形があったんだということをおもうんですよ。

徳久 こう思い出してみても、とに角楽しかったということだけはおぼえています。

§ 旅へ

及川 どっかにかいてあるでしょ。(本を見ながら)あの汽車の中の情景で、窓の絵だったと思うけど、あれの写真ないかしら。

津守 その「旅へ」っていうの、それが一番最初に載ってますから、新庄先生、そのころのおぼえていらっしやることなんか、少し輪郭をお話し下しますか。

新庄 これは一番先に書いてあっても、私これが始めたのは、「人形の家」だの「箱の街」だのそういうものがあって初めてその考えが私にも思いついたからなんです。それが「旅へ」という誘導保育で、これはいろいろと発展して行くひとつの大きな題になると考えたものですから、次々として行って、やってくるうちにまたいろんなことが出てきてね、もうしょっちゅう大塚の駅なんか見て歩きましたよ。(笑) そうすると、荷物だとかいろいろ気がついて……。

及川 (本を読みあげながら) 売店、改札口、切符売場、荷物受付、はかり、食堂、駅のお弁当売り……

新庄 ええ限りなく出てきたものですから、それに制作が入っていたわけで、それでもうずいぶん長い間あそびました。どこでもあそべるんですよ、これ。

津守 今のものよりも、何かこう規模が大きいみたいですね。手先だけで作るのではなくてね。

菊池 そうですね。

新庄 あのお弁当のごちそうなんかも、のり巻きなど何でこしらえたらいいかしらと思つて、ずいぶん考えました。

及川 そのお皿でも、粘土でこしらえたり紙でこしらえたりね。

菊池 その「旅へ」っていうのは固定していなかったわね。どこでもできましたものね。あの材料はとても融通が利くのね。

新庄 そうなの。それでずいぶん長い間あそべたわけですよ。

でもね、とに角こういうことをするのは、やはり大きい組にならないとできないわね。入園したての子どもは、やはり個々の手技というものが必要じゃないでしょうか。はじめから誘導保育つていっても、小さい子どもにも誘導保育は、私、無理だと思つてです。

菊池 なかなかね、ある目的を共通の目的で進むのだから、やはり三才児なんかにはまだ無理ですわね。

新庄 できませんわね。それから四才でも、終りごろにならないと無理ですわね。

菊池 そう、年長組ですわね。

新庄 そこでやっぱり手技とか、そういうのがもとになるんじゃないでしょうか。ですからただ誘導保育といつても、一口にはいえませんわね。そのものがありますから。

§ 人形の家

津守 人形の家は、どうやってできたのですか。

菊池 私はいなか育ちでしたから、子どものころよく竹やぶだの杉林に行つたんです。いなかですから縄だの板だのあるでしょ。それで竹と杉の木とつないでこうして板をわたして、これは誰ちゃんのうち、こっちは誰ちゃんのうちっていうふうにしてあそんだのです。その二階になった所に床があつて、これは私のうちだなんていって、それがとってもおもしろく、夜になつてもうちに帰れなかつたんです。母に、もう入れないなんていわれて、戸をしめられたこともあるくらい楽しかつたんです。それで、それじゃ都会の子どもなんか、そういうことをしたらどんなによろこぶかしらと思つてね、それがヒントで人形のうちをやつてみたのです。もうひとつの自由になるうちっていうのね、子どもが。そういうのどうかしらと思つて、ま、何も考えず自分のいなかでの育つた時の状態を思つてやったら、大変に子どもがよろこんでね、あのHちゃんのお母さまなんて、もうかかりつきりに板をもつてきて下さいました。

及川 あれでは菊池さん、ずいぶん苦労しましたね。屋根をこしらえたり、それから牛がいたじゃありませんか。(笑) この牛だつてずいぶん骨がおれたんじゃないの? 工夫して。

菊池 いつか倉橋先生に、どうしてこの牛を考えついたっていわれ

たんですの。私、あの時、アメリカン・チャイルドフード・エデュケーションという雑誌が来ていたでしょ。あれを見た時に、何かに馬が作ってあったのでそれにヒントを得たのです、そして最初馬小屋をこしらえたんですよ。そこはバラックの便利さで、どこへでも釘が打てましたものね。

新庄 ああそう、それが牛になったの。(笑)

菊池 ええそれが牛にね。でもはじめは馬をこしらえましたよ、リノゴ箱で、あのバラックの海の組のすみにね。

ちょうどこちらへ引越しの時だったんです。それで暮にね、私も、その人形の家はおいてこようと思っただけなんです。いろいろトラックで運ぶのに、そんなもの持ってこられないからって。

そうしたら倉橋先生に、いやそれが一番大事なんだから持って行って置いていわれて、とても感激したんです。先生にはこれが大事なんだ、ああそうかと思っただけ、とても嬉しかったですわ、その時。新庄 ほんとにずいぶん大きなものでしたわね。あなた、高島屋かなんかに出したんじゃないの。(笑)

菊池 あの時菅原先生が高島屋の顧問だったのね。

及川 それで二人で高島屋に行ってお人形のうちをこしらえてもらって、お人形ももらいましたね、ほら着物を着たあれ。

菊池 私がこしらえたおうちはこのひんまがっているんですよ、

素人だから。だけど高島屋ではそれを見て、ちゃんと専門家が作ってくれて。それでそれをやり直して、今度こっちへ移って行啓の時なんか、したんです。

及川 まああとに角、子どもができる材料を見つけるのが苦勞ですよ

ね。本当のものを買ってくるのなら楽ですけどね。

新庄 このごろは本当のものができてますから考えなくてもすんじやうのね。

菊池 私あの時、鳩時計を考えましたでしょ。あの分銅を松かさでしたのが嬉しかったですわね。包み紙のひもをこう結んでくさりにして、松かさを茶色にぬって、そして鳩時計で引っぱるとギギギとなりませうね。あの工夫をした時、嬉しかったですわね。新庄 だからもう何でも、見るもの聞くもの、幼稚園の保育室の中にあれを持ってきてきょううふうにして子どもがそれを扱ってあそんでくれるかというようなことが、年中頭の中にありましたね。(同意)

菊池 だから私、あのころ浅草で、エノック・アーデンの映画がありましたね。それを見に行った時に、その中に出てくる子どもが釘だるをこういうふうにしてその中に乗ってあそんでいるのを見て、ああこれがいいな、ここの幼稚園の庭をみんな動物園にしたらおもしろいなんて思ったことがありますよ。鮭の木の箱なんか見ると、ああこれはワニにいいとかね。(笑)

及川 中味を出して、入れものだけほしくなっちゃうのよね。

津守 本当ですね。買ったものと違って、ひとつひとつの材料が、心がこもっていますね。

徳久 お人形のうちのベッドだの椅子だのがだんだんはやって、このごろではあれがひとつのコーナーにできあがったのが出てますでしょ。きれいですけど、味がありませんね。(同意)

菊池 私のあの不細工なうさぎの耳の椅子ね、あの時楽しくて、うちに帰ったのは夜の十一時ごろでした。(笑)

及川 あの当時、先生が夢中だったのよ、子どもがよろこぶ前に先生が大よろこび。

菊池 のこぎりミシンていうのを買っていたでしよ。子どもに輪郭を描いてもらって、それでこぎやってこしらえてね。

及川 そうそう曲線を切るのね。ミシンと同じ足ぶみな。切るのは私ずいぶんひき受けたわ。

新庄 楽しかったわねえ。

及川 先生がまず喜んでしてる、子どもがする、それから今度は、ここでは親たちが送り迎えをしますでしょ、でその途中を見ているものだから、そこへまたひきこまれて、「こういうものがうちにごさいますから、先生何かお使いになりませんか」なんてね。

菊池 そうですね、おうちの方たちも持ってきて下さいましたね。

§ わたくし達の自動車

徳久 私のこの自動車の時も、塗料屋さんの父兄がペンキだからカーを下さったのでそれで外に出してもぬれないような色がぬれたんです。

新庄 すばらしかったですね。

及川 徳久さんの自動車はすごく大きくてね。(笑)もう四人位で動かさなければ場所が変えられなかったのよね。(笑)

菊池 何世紀かの自動車だわね、今見ると。(笑)外側は緑色じゃ

なかった？

新庄 なかなか大変よ、これ。それで動いたの？

徳久 動いたんですよ、だから喜んでやった。

菊池 押して歩くのね。

徳久 初めは部屋の中で作ってたんです。それからエッサエッサ外へ運び出して、それで外で動かして遊んだのです。

及川 “山の組”と書いてあるわ、この自動車号は。嬉しかったでしょうね。

徳久 ハンドルは何か幼稚園にあった古い丸い棒をやっぱり糸のこでこぎ切ったんです。子どもがいろいろ考えてくれますね。まだこれが足りない、まだこれが足りないって。

津守 今こんな大きな自動車なんて作りませんね。

徳久 作りませんねえ。

津守 どうしてですか。(笑)

徳久 今日出てくる時に、ちょっと私がアルバムを持ってきたので、幼稚園で見せて「これ作ったんだ」といったら、先生たちなかなか本気にしないんですよ。「こんな作ったらいいですね、誰が作ったのか」っていうから「先生と子どもですよ」っていったんですけどね、でも作りたいようなことってしましたがね。

津守 今はどうしてこんな大きなもの作らないんでしょうねえ。

新庄 いろいろまにあってるからじゃないのかしら。

菊池 あんまりおもちゃがたくさんあってねえ。

新庄 ええ。そして幼稚園でこういうものがつていうと、すぐよろこびそうなものを作らせてしまいますからね。

菊池 そうなのね。

及川 そういう風に商売人にこしらえさせると、もう何だか味がなくなってしまうのね。

(アルバムを見ながら) 大人だつてのれそうね、二人位。

徳久 ええ、のれましたよ、私。

及川 ここにかいてありますよ、三円十三銭つて。

新庄 でもそういう値段が書いてあるのもいいことね。

津守 だけど、よくこうやって写真が今とつてありますね。

徳久 私自分でとつた写真ですよ、スナップ。

菊池 そのころは皆自分でとつたのね。もう幼稚園の先生は、写真屋さんだめだと思いましたがね、あのころ。自分でおもしろいところをとらないとだめだと思って、なけなしの財布をはたいて、私も、新庄先生が持つていらしたのと同じフレックスを買つたんです。

新庄 幼稚園用にすぐ買ったんですよ。

津守 ずいぶん新式ですね。

菊池 私のは中古で百五十円でした。でも戦争の時防空ごうに入れたんですよ。そうしたらあれはジャバラがのりづけですね。それでだめになってしまいましたけれど。

徳久 もう次から次へと発展して行きましたね。(同意)

新庄 そう、そこが誘導保育の一番大切なことね。

徳久 子どもが考えてくれるし、先生ももう全く外に出ると、あの

ころは自動車ばかり見ていました。(笑)

菊池 誘導保育でも長編と短編がありますわね。よく砂場なんかで

も田植えのところなんかをしていましたね。あのころ、そういうのは、まあいくつかあつて。

徳久 短いね。

菊池 ええ、やっぱり短編と長編があるんじゃないかっていう気がしますね。年令やその時期によつてね。

津守 そのころは、子どもの人数はどれくらいですか。

菊池 戦前は定員が三千人でしたね、それでお休みなんかがあると、二十五人から二十七、八人です。

新庄 そのくらいがいいわね。

及川 材料なんかも、いろんな物資が豊かになつて工夫する余地が無いので、あのころのように特別な味がなかなか出ないですね。

菊池 本当にそう思いますね。

及川 もう規格品が多くて。

菊池 私、人形芝居の舞台でもそう思うんですが、初めはわくだけでやつたでしょ。そうしたら業者が作るつていうので、できてみたら、何だか彫刻したみたいなのがついていてね。

及川 あのころはもうひとつも既製品は無いんです。材料から方法から、それをみんな自分たちが工夫するところに興味もあつたし、できた結果も味があるんじゃないでしょうか。やっぱりそういうふうにするから、活動面も多くなつて、子どももその中にひきこまれて先生と一緒にやつてやるのね。だからあんまり満ち足りた時期の子どもは、かえつてそういうことを知る余地がないのね。

津守 今この幼稚園で使っているもので、そのころ作つたもの、

そのままでもなく、結局それが伝わっているといつたものがい

ろいろあるわけですか？

及川 このごろどうなされたかしら、堀合さんが、おままごのついでを、石油箱をはがしていくつにもして作ったの、あれこのごろもありますか。

菊池 黄色くぬったのね。

及川 ええ。

菊池 あれなくなつたんじゃないかしら。

及川 ああいう味のあるものがないのね。あの柵にしても、先生は本職の木工さんのようにはできませんでしょ。いびつだったりろいろと。そこに何ともいえない、子どもとピッター合う感じがでるのね。規格してキチッと木工さんがこしらえたような、ああいう柵じゃおもしろくないの。

菊池 そうね、柵も、私たちが作ったものは、こうひんまがつたり、片寄ったりしてね。このごろはもうちゃんとできてるから、いつだって立派なのがあるけれど……。

及川 何ていうのか、子どもの素材さがうばわれたようだね。

§ 誘導保育と現在

及川 どのくらいかかったでしょうね。あなたの「旅へ」っていうあそびは、どのくらい続いたかしら。

新庄 そうね、もう一学期間ははずとね。

菊池 そうそう寒いころもやってましたね。

及川 結局まあひとつのものを作るにしてもどっかに行つてちょっと調べてきたり、材料を集めてきたり、実際に子どもと一緒にし

たりつていうような段階があつて、相当日数と時間をかけているんですね。だからひとつのテーマをきめれば、もうそれは本当に一学期続いていくつていうようなことで、そこに活動する子どももそれほど目まぐるしくやらないのね。ゆっくり進んでいくの。

菊池 小さいテーマが次々に進むから、子どもはあきませんわね。

今度は自動車を作ろうとか、今度はラジオを作ろうとかね。

津森 一週間や十日じゃ終わらないですね。

新庄 とてもとても。それじゃもうほんの断片的な、ある一コマしかできませんものね。さっき私、大きい組でなければって申しま

したけれど、虫の家をした時はあれ小さい組だったんです。

及川 子どもはいわれた一部分をしているんだけど、結果はそういうまとまったものになつて行つた時に、自分がみんなしたような気持でよろこぶのよね。(同意)

菊池 で、その小さいものひとつずつ集まってひとつのあそびにするつていうのは、今だって三才だってやりますね。たとえばおもちゃを作るでしょ。それをその日一日で持つて帰させると、倉橋先生は「ちぎれ保育」とおっしゃったわけです。だからそれを「じゃあこれこんなにできたから、おもちゃ屋さんにしませうか」というような形にもつていけば、できるんじゃないかしら。

新庄 そうね、そこがやっぱり先生の力ですね。

菊池 今だってできないことはないし、持つて行き方ですね。

新庄 でもまあ、この園舎に移つたころは、本当に最高潮でした

ねえ。(同意)

及川 ちょうど、バラックが焼けたあとで、何も物はない、どうせ

買い整えなければならぬというふうな、まだ蓄積するはじめでしたからね。

菊池 私今考えてみると、非常に自分は無鉄砲だったのね。勝手なことやってたみたい。

及川 卒業したてで、勇敢だったのね。

菊池 それに因習が無かったわけなの、焼けてしまつて。

津守 で、戦後の誘導保育っていうのは、どうでしょうね。

菊池 規模が小さいですね。おもちゃ屋さんとか、動物園とか。

徳久 何ていうんでしょう。ひとつの単元の展開みたいのが、いわゆる誘導保育みたいになつていふんじゃないですか。

菊池 そうなのね。規模が小さいと思つてね。前のが大きすぎたのかしらとも思つてみますが。(笑)

及川 でも何ていうかしら、そういうふうに興味っていう面からいうと、大まかな長く続くものがいふんですけれども、やっぱり、

どんどん変化を求めるといふような保育あるんじゃない？ ひとつのことを長くやっているとあきると、だからそういう面で、割に展開が早いんじゃないかしら、一学期もやっているとあきるといふような誘導保育なんて、ないでしょう。

菊池 そうですね、あれはひとつの題だけれども、内容が、今度は食堂を作るとか、今度は切符売り場だとかいろいろあったから続くんだけれど、ひとつの小さいものだったら、やっぱり子どもの興味ってものは、そう続かないでしょうね。

津守 先生の方も、ビジョンっていうか、こうまぼろしが大きくなれば大きくなるし、それが小さいと小さくなるのではないでしょう

うか。

菊池 そうですね。

及川 やっぱり、人間全体的に忙しいんじゃない？(笑)

菊池 そうですね、まわりがね。

津守 菊池先生の文章にも、ちよつと終りの方に書いてありますね、その誘導保育をやつての反省は、何かものを作りあげるといふところに中心が行つてしまつて、子ども一人一人が見失なわれやしないかということに反省しましたというふうな意味のことが書いてあつたようです。

でも私ね、本当にこれを読んでみると、とてもスケールが大きいかから、何だかこう今やっているのが貧弱に見えてきました。

(笑)

及川 部屋でもね、あの時分、部屋がいっぱいで、せまいくらいでした。あの自動車が一入つてごらんなさい。子どもは小さくなつてきやならない。(笑)

津守 どうして今そういうことができないのかしらと思うと、進歩してゐるんだか後退してゐるんだかわからないような気もするんですけどね。どうなんでしょう。

及川 人がふえて、ふつうの住いもそうなつてでしよ。アパートや何か。今までは広いうちに住んでいて、あそびもそういうふうになつていたんじゃないでしょうかね。

菊池 世の中全般的な風潮がこういふことになつたんでしよかね。

及川 それに今幼稚園の数も多いです。そして外と中の研究会研究会でね。だからそういうふうないろんな意味で、子どもとの

いろんなあそびっていうことが、ずいぶん侵蝕されているんじゃないかしら。

徳久 人形芝居の人形でも、ああして一生けん命コツコツ作りましてでしょ、今作るひまもないですね。(同意)

及川 あなたも主任していらっしゃるから、いろんなことの責任があるでしょ。だからそのあそびだけに、没頭できないのよね。その意味で、なりたての先生に大いにやっていただかなければ。

一同 そうね、そうそう。

菊池 あんな人形を、下駄屋から桐くずを買ってきてコツコツ作るなんていう人は、今いないですからねえ。

津守 本当に今、誘導保育なんていうのんびりしたことをやってる所は少ないでしょうね。

徳久 こんな大きじやないですけど、まあやってますけどね、小さい規模ですね。

及川 割合に早く、どんどんちがったものに移って行くのね。

徳久 そうですね。まあ動物園とか何とか、大きな動物を作ったりなんかしても、場所がせいまいから。

菊池 そうですね、並べておけませんものね。

及川 今、こうしてお話するだけでも、楽しさがよみがえってくるわね。(同意、笑)

新庄 本当ねえ、その思いついた時の嬉しさってないの。

菊池 そう、嬉しかったですわねえ。

及川 部屋毎に何かやってるんですね。

新庄 決してとなりと一緒にじゃないんですね。

及川 それに、たいしてお金も使わなかったわね。(同意)

§ 誘導保育と単元学習

(坂本彦太郎先生登場)

及川 お留守におじゃまして、あの誘導保育の楽しかったことを話してたんです。

津守 そういう楽しさをいろいろ伺って、やっぱりね、昭和七年、

八年ごろが、皆さん一番楽しい最高潮だったっていうことで、それがちょうど今のこの本の第四篇の主題なんですけれどね。

坂元 それは、一九三二年～三年なんですすね。アメリカでは、いわゆる進歩主義の教育運動っていうのが一番盛んだった時代なんです。で、その具体的なあらわれは、いわゆる単元学習と今いってまうけど、昔だったら作業単元といていたもので、ああいう種類のことが非常に発達した時代なんです。それで、外形的にも本質的にも、皆さんが誘導保育としてやっていらっしゃることが、非常によく似ているんです。それが、二つとも文章で読むと、実質的形式的には似ていながら、動機とか目的というのがちよつと違うんです。例えばアメリカ流で行くならば、子どもなり幼児なりの経験とか活動というもののあるままとりに帰してある。これは幼児にはあまりやらないんですが、小学校から中学校位の段階でよくやるんですが、どちらかというとそういう子どもの活動のままとまりももう少し率直に言えば、子どもの計画的な自発的な活動っていうようなものを中心にしたような、そういうままとまりなんです。ところが、こちらの先生方のは、実際やって

いることは非常によく似ているのだけれども、意識的には子どもは、皆と一緒にそう簡単には遊べない。そのような子どもをうまく遊びの中にひきずりこむ手段というようなのが、非常に強く出ているでしょ。そういうのはっきりした目標をもった作業单元だという所に、非常に日本流のおもしろいものがあるんじゃないかというのを、私こんなこと、生まれて初めていうことですけれど、感じるんですよ。

及川 ああいうあそびをしてるとね、何もしないでただいるっていう子どもは、いけませんね。何か自分でやろうと思う。自分の適材適所を見つけて働いている。

坂元 やつてることがね、一つのまとまったものをずっと展開するんで、そのやつてることがら自体は、少しも違わないんですよ。ただ裏にある考えというかな、目あてというものにちょっと違

たところがある。で、日本のは非常に実際的なんですね。子どもたちがうまく遊べない、入ってこない者のためにしつらえてやるんだという気持が大変に強い。これは論理から見ただ、先生たちはそういう理屈でおやりになったのではなくて、やっぱりアメリカ流の、子どもの活動っていうようなものをおもしろくやるというところの方が中心であって、そしてそれを俗人に説明するために、便宜的に倉橋先生がいわれたんじゃないかなろうかというふうにも感じるんですよ。

津守 いや私もね、先生方が楽しい楽しいといわれるのは、やっぱり先生のそれだけのエネルギーというか活動力がそこにあふれているわけで、そこにまた子どもの活動が加わってくるという、そ

ういう心理学的にも、非常に説明のできることだと思っんです。坂元 その子どもの楽しい活動と先生の楽しい活動とが一体となったものを、いつてらっしゃるんでしょうね。そういう考え方がまあ作業单元という考え方の一番の基本的なものなんですね。で、現実にはそうやっているにもかかわらず、遊びの中に引き込むとか何とかいうことが書いてあって、誘導という名前のつけ方が、ちょっと違ってるわけなんです。

津守 そうですね。その点がちょっと違いますね、あのユニット・オブ・スタディと。

坂元 だけれども、現実はまだ誘導じゃないんですね。もう向こうもこっちもとびこんでやっついていらっしゃる、そういうものをいつてらっしゃるような気がするんです。今もちょっとお聞きしただけでも、そんな感じがするんですよ。

津守 それで今ね、昭和七、八年からその後の発展を少し話していただいたんですけど、戦争中はそれがやはり少し下火になつて、それから今度は戦後は、規模が小さくなってきているというふうな、ま、大体大づかみにしますとそういうようなお話だったんです。で、やっぱり昭和七、八年のころは大きいんですね。

一同 ええ。

津守 今日、その当時の誘導保育のことをいろいろと伺って、大変ありがとうございました。現代の幼児教育が、形はととのつても、先生と子どもとのたのしさを失うことがないように、先生も大きな夢をもって、規模の大きな創造的な保育ができるように進んで行くことを期待したいと思います。(昭和41年5月17日)